

標津町でムセンスゲ *Carex livida* を発見

札幌市 齋藤 央

近年、道東の低地でムセンスゲの新自生地が次々と報告され（佐藤 2020、富士田ほか 2021、加藤ほか 2022）、従来は猿払川流域、大雪山、知床羅臼湖の3カ所のみとされてきたムセンスゲが道東ではやや高密度で分布することがわかってきました。

2022年度、別海町内での湿原の踏査を進め、ムセンスゲの新自生地を幾つも見つけるうち、幾つかの自生地が空中写真上でよく似たテクスチュアを呈していることに気付き、「このテクスチュアの湿原を見つけて踏査すれば、別海町外でもムセンスゲが見つかるのではないか」と考えました。近隣自治体の山野を空中写真で精査すると、標津町標津の南東部、茶志骨との境界に並走する丘陵地帯に、該当する湿原が二

つ見つかりました（図1）。かつて標津川の氾濫原に広がっていた湿原の名残とみられるこれらの湿原は無名で、本稿では標津南東湿原 A・B と仮称しておきます。

2022年11月6日朝、標津南東湿原 A に足を踏み入れました。未明に氷点下になったせいで、普段は弾力があるであろうミズゴケのブルトは丘陵に遮られた日陰では石のように固く、日光が当たり融け始めた場所では踏むたびに電球が割れるような音を立てて潰れました。味噌状泥炭の上にコタヌキモ、ホロムイソウ、ミカヅキグサなどが疎生する草原様区画が随所にあり、ムセンスゲが好みそうな環境は充分にあるように見受けられたものの、東西に伸びた湿原の入り口にあたる西端部ではムセンスゲは見つかりませんでした。

高さ1.5-2mのハンノキの疎林を抜けて東隣の沢筋に入ると、再びミカヅキグサやコタヌキモなどが目につく区画に入りまし



図1 標津南東湿原（仮称）の位置図

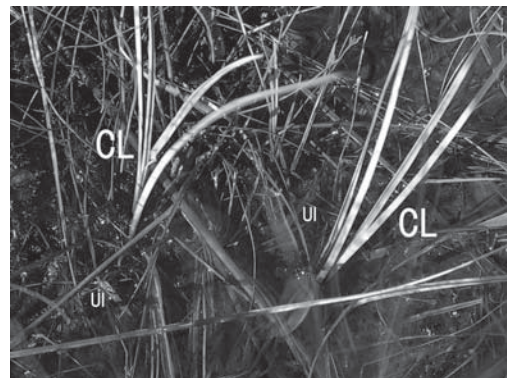


図2 標津南東湿原 A（仮称）のムセンスゲ (CL)。根元にコタヌキモ (UI) が見える